

(一社)福島市私立幼稚園協会 教育研究部会 第2回合同研修会

日 時 : 令和7年10月29日(水) 15:30~17:00

タイトル : 『インクルーシブ社会の中で多様性を尊重し、一人ひとりがよりよく生きる
ために出来る事子どもの遊びの見立てについて』

講 師 : 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
インクルーシブ教育システム推進センター上席総括研究員(兼)センター長
久保山 茂樹先生

会 場 : 福島市保健福祉センター 5階 大会議室



《特別研修会に参加して～アンケートから～》

【1 感想】

① 子ども主体の保育への気づき

- ・ 「子どもが園に来て何をしたいと思っているか」を意識する大切さを学んだ
- ・ やらせる保育ではなく、子どもの「やりたい!」を叶える環境づくりが重要

② 支援の目線とかかわり方

- ・ 「支援の子」としてみるのではなく、一人の子どもとして関わる姿勢
- ・ 苦手よりも得意を伸ばす関わり方が大切
- ・ 本人のペースを尊重し、寄り添う声かけを意識

③ 多様性と共感のはぐくみ

- ・ 少数派の子どもに多数派を近づける発想で新しい活動を展開
- ・ 多様性を認め合う言葉かけが、周囲の子どもにも影響を与える
- ・ 「共感」が人間関係の輪を広げるきっかけになる

④ 言葉かけの影響

- ・ 「ゆっくりでいいよ」などの言葉が周囲の子にも届き、多様性を学ぶ機会になる
- ・ 保育者の言葉かけが子どもの行動や意識に大きく影響することを再認識

⑤ 講師の温かさで共感

- ・ 久保山先生の温かい語り口に心を動かされた
- ・ 実体験を交えた具体的な話が分かりやすく、説得力があった
- ・ 「出会った子がみんな先生」という言葉が印象的

【2 今後の保育に活かせること】

- ・ 支援の枠を外し、一人の子どもとして関わる柔軟な保育
- ・ 好きなこと・得意なことを中心に集団活動へつなげる工夫
- ・ 「良かった日の保育」を振り返り、成功要因を次に活かす
- ・ 苦手を克服するより、得意を伸ばすスタンスを重視
- ・ 言葉かけを意識し、子どもたちに安心感と多様性の理解を広げる
- ・ インクルーシブ教育・共生社会の視点を持ち続ける

【3 研修への意見】

- ・ 講師の雰囲気柔らかく、安心して学べた
- ・ 実体験を交えた具体的な話が印象に残った
- ・ もっと長い時間で話を聞きたいとの声多数
- ・ 忙しい時期でも参加しやすい日程で助かった
- ・ 保護者対応についても今後さらに学びたいとの要望あり

◎園の研修を通じた主な反省と学び

① 園児の主体性を尊重する視点到気づいた

- ・ 子どもが「園に来て何をしたいか」を考える視点が不足していた
- ・ 保育者主体で「やらせる保育」になっていたことを反省
- ・ 子どもの「やりたい」「作りたい」を叶える環境づくりの重要性を学んだ

- 主活動の流れを守りつつも、子どもの意見や発想を柔軟に取り入れる必要性を認識

② 支援が必要な子どもへのかかわり方の見直し

- 「支援の子」として見てしまう危うさに気づいた
- 苦手な部分ばかりに目が向きがちだったことを反省
- 得意分野や好きなことを活かして集団に結びつける工夫が必要
- 本人のペースを尊重し、寄り添った声かけを心がけたい
- 支援を「補う」だけでなく「伸ばす」方向へ転換する意識を持つ

③ 多様性と共感を育む保育の必要性

- 少数派の子を多数派に合わせようとしすぎていたことを反省
- 「違い」を問題視するのではなく、価値として認める姿勢が必要
- 多数派が少数派に歩み寄る発想で新しい活動を展開できると学んだ
- 言葉かけが周囲の子どもにも届き、多様性理解を広げる効果があると気づいた
- 共感が人間関係の輪を広げ、安心感につながることを再確認

④ 保育の振り返りの視点を広げる

- 「失敗した保育」ばかりを振り返りがちだったことを反省
- 良かった日の保育を振り返る習慣が不足していた
- 成功要因を見つけて次に活かすことの重要性を学んだ
- 反省＝改善点だけでなく「強みの再確認」として振り返る必要性を認識

⑤ 講師の話から得た気づきと感情の動き

- 久保山先生の温かい語り口に心を動かされた
- 実体験を交えた具体的な話が分かりやすく説得力があった
- 「出会った子がみんな先生」という言葉が印象的で、子どもから学ぶ姿勢を再確認
- 保育者自身が柔軟な発想を持ち、安心感を与える存在であることを意識
- 保護者対応や共生社会への視点についても新たな学びを得た

◎共通して見られた反省点と今後に活かす方向性

視点	主な反省点	今後活かす方向性
子ども理解	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの「やりたいこと」より保育者の意図を優先してしまう場面があった。 ・気になる子の「できない部分」に目が向きがちだった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの主体性を尊重し「園に来て何をしたいか」を意識する ・できること・得意なことを中心に理解を深める
支援の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・「支援の子」としてラベル化しがち ・苦手な部分を補うことに偏りやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人の子どもとして関わり、支援を外した視点も持つ ・苦手克服より得意を伸ばす支援へ転換
多様性	<ul style="list-style-type: none"> ・少数派の子を多数派に合わせようとしすぎる ・違いを「問題」として捉えがち 	<ul style="list-style-type: none"> ・多数派が少数派に歩み寄る発想を持つ ・言葉かけを通じて多様性を認め合う環境づくり
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・「失敗した保育」ばかりを振り返りがち ・良かった日の成功要因を見逃していた 	<ul style="list-style-type: none"> ・良かった日の保育を振り返り、成功要因を次に活かす ・反省＝改善だけでなく「強みの再確認」として振り返る
保育者の姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者主体になりがちで柔軟さが不足 ・言葉かけや態度が子どもに与える影響を軽視しがち 	<ul style="list-style-type: none"> ・柔軟な発想を持ち、子どもに寄り添う姿勢を意識 ・言葉かけを通じて安心感や共感を広げるモデルとなる